

令和4年度

—千葉県—

君津市内遺跡発掘調査報告書

富吉遺跡Ⅵ

戸崎城山遺跡 32 地点

天神台遺跡Ⅶ

令和5年3月

君津市教育委員会

令和4年度

—千葉県—

# 君津市内遺跡発掘調査報告書

とみよし

富吉遺跡VI

とぎきじょうやま

戸崎城山遺跡 32 地点

てんじんだい

天神台遺跡VII

令和5年3月

君津市教育委員会

# 序 文

小糸川・小櫃川という二大河川を有する君津市には、豊かな自然があり、広大な市域には数多くの貴重な歴史が残されており、これらの遺跡からは先人たちの文化や生活の痕跡を感じることができます。

しかしながら、経済発展に伴う開発行為を進めるなかで、遺跡が破壊されてしまう側面があることも事実であります。その場合は、開発行為で失われる遺跡に対して、事前に「記録保存」という手段を講じて後世へ正確な情報を残す発掘調査を実施しています。

本報告書は、国庫並びに県費補助により令和4年度に実施した君津市内遺跡発掘調査の成果をまとめた報告書です。対象となった遺跡は、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡である富吉遺跡と天神台遺跡、市内でも有数の古墳の数を誇る戸崎城山遺跡・戸崎古墳群の3遺跡であります。

本書が学術資料、教育資料として活用されるとともに、市民をはじめ多くの皆様の目にとまり、遺跡というものがごく身近にも存在しているのだということ認識していただく契機となり、埋蔵文化財の保護を推進することができましたならば幸いです。

結びに、ご指導・ご助言いただきました千葉県教育庁教育振興部文化財課、発掘調査・整理作業に従事した調査補助員の方々、ご協力をいただいた地域の方々、関係者の皆様に対しまして、心から感謝の意を表します。

令和5年3月

君津市教育委員会  
教育長 粕谷 哲也

# 例 言

- 1 本書は、令和4年度調査実施の千葉県君津市貞元字猪ノ尻192番4に所在する富吉遺跡Ⅵ、千葉県君津市戸崎字東千河1084番2の一部に所在する戸崎城山遺跡32地点、千葉県君津市上字天神台648番・649番に所在する天神台遺跡Ⅶの成果を収録した、令和4年度君津市内遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫・県費補助事業として千葉県教育委員会の指導のもと、君津市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査・整理作業期間は以下のとおりである。

富吉遺跡Ⅵ	(確認調査)	令和4年5月23日～同年5月24日
	(本調査)	令和4年6月1日～同年7月1日
戸崎城山遺跡32地点	(確認調査)	令和4年6月3日～同年6月10日
	(本調査)	令和4年6月13日～同年6月21日
天神台遺跡Ⅶ	(確認調査)	令和5年1月23日～同年1月27日
整理作業		令和4年12月7日～令和5年2月28日

- 4 発掘調査は、富吉遺跡Ⅵを朝倉 唯、戸崎城山遺跡32地点を矢野淳一、天神台遺跡Ⅶを朝倉・曾我真実子が担当した。整理作業・原稿執筆は、富吉遺跡Ⅵを朝倉、それ以外を曾我、編集は曾我が担当した。
- 5 発掘調査で使用した遺跡コードは、富吉遺跡：KT 051、戸崎城山遺跡：KT 002、天神台遺跡：KT 036である。なお、遺物注記の際には、コードの次に調査地点を付した(例：KT 051Ⅵ)。
- 6 遺構・遺物の縮尺は各実測図に明記した。方位は座標北であり、測量値は世界測地系による。
- 7 今回の調査に伴う遺物・図面・写真等の記録類は、君津市教育委員会が保管する。
- 8 調査組織は下記のとおりである。

《君津市教育委員会》

教育長：粕谷哲也

教育部長：安部吉司

生涯学習文化課長：塚越直美 副主幹(事)文化振興係長：富眞紀子

主査(再)：矢野淳一 文化財主事：朝倉 唯 文化財主事：曾我真実子

- 9 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

# 凡 例

- 1 本書で使用した地形図は、第1図 地形図「鹿野山」(1:25,000)国土地理院発行、第2図 君津市地形図「D-5」(1:2,500)君津市発行、第12図 地形図「久留里」(1:25,000)国土地理院発行、第13図 君津市地形図「J-5」「J-6」(1:2,500)君津市発行、第16図 地形図「鹿野山」(1:25,000)国土地理院発行、第17図 君津市地形図「F-6」(1:2,500)君津市発行である。
- 2 本文中に記載した遺構の重複関係は(旧)→(新)の順に記載した。
- 3 遺物実測図のスクリーントーンは、下記のことを示す。



# 目 次

序 文・例 言・凡 例

第1章 富吉遺跡VI	1
第2章 戸崎城山遺跡32地点	16
第3章 天神台遺跡VII	25

## 挿図目次

第1図 富吉遺跡周辺の遺跡	2	第11図 その他出土遺物実測図	14
第2図 富吉遺跡調査区位置図	4	第12図 戸崎城山遺跡周辺の遺跡	18
第3図 富吉遺跡VI基本土層図	6	第13図 戸崎古墳群分布図	19
第4図 富吉遺跡VI確認トレンチ配置図	6	第14図 戸崎城山遺跡32地点トレンチ配置図 及び2 T断面図	22
第5図 富吉遺跡VI遺構配置図	7	第15図 戸崎城山遺跡32地点木調査及び 出土遺物実測図	23
第6図 SI-001実測図	8	第16図 天神台遺跡周辺の遺跡	26
第7図 SI-002実測図	9	第17図 天神台遺跡調査区位置図	27
第8図 SI-003実測図	10	第18図 天神台遺跡VII基本土層図	28
第9図 SI-004及びPSD-003遺構実測図	11	第19図 天神台遺跡VII確認トレンチ配置図	29
第10図 SD-001・002及びFSK-002・003遺構実測図	12		

## 表目次

表1 富吉遺跡VIピット観察表	14
-----------------	----

## 図版目次

図版1・2 富吉遺跡VI
図版3 戸崎城山遺跡32地点
図版4 天神台遺跡VII

# 第1章 富吉遺跡Ⅵ

## 1 調査にいたる経緯

令和4年3月17日付けで、個人申請者より文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出があった。開発目的は個人住宅建設で、開発予定面積は551.9㎡である。開発区域は「周知の埋蔵文化財包蔵地内（富吉遺跡）」で、開発着手前に確認調査を実施する必要がある旨を事業者に説明した。協議の結果、計画どおり事業を行うことになり、遺跡の規模及び性格を把握するための確認調査を実施することとした。確認調査は、令和4年5月23日～同年5月24日に君津市教育委員会で行った。

確認調査の結果、古墳時代の堅穴住居跡などが検出されたため、事業者と市教育委員会生涯学習文化課とで再度協議を行い、埋蔵文化財をどうしても保存することができない137.9㎡について、本調査を実施することとした。本調査は、令和4年6月1日から同年7月1日まで行った。なお、調査はすべて君津市教育委員会で行った。

## 2 地理的・歴史的環境（第1図）

富吉遺跡は、君津市貞元に所在し、JR内房線君津駅の南東約1.7km地点にある。小糸川下流域左岸の低位段丘に位置し、標高は約10.0m前後である。遺跡周辺の環境は、小糸川右岸がすでに市街化が進んでいるのに対して、左岸には水田が広がる農村集落的な景観が残されている。左岸の低地・丘陵上には多くの埋蔵文化財が分布している。近年、調査例も増えてきたが、遺跡の広がりや性格などはまだ不明な点が多い状況である。

発掘調査をした周辺の遺跡をみると、同じ低地遺跡であり、以前、区画整理の計画範囲に入っていた2.上湯江遺跡、7.釜神遺跡、8.中富遺跡がある。上湯江遺跡<sup>(1)</sup>では、平成6年度に確認調査が実施され、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟以上を確認し、8世紀代の土器も出土したことから古代の集落の存在が裏付けられた。この他、中世の井戸跡と溝跡を検出し、出土した陶磁器の中には12世紀末から13世紀前葉の龍泉窯系の碗や初期かわらけがあり、鎌倉とつながりのある在地頭土層の屋敷跡があったとも考えられている。平成23・26年度には個人住宅建設に伴う確認・本調査が実施され、古墳時代後期から奈良・平安時代の溝跡・土坑・ピットなどが検出された。湖西窯産の須恵器杯が出土し、集落跡の存在を示唆している。平成26年度の調査では、古墳の周溝と考えられる溝跡が検出され、古墳が存在していることが判明した。平成29・30年度には、トマト栽培施設建設に伴い、確認・本調査を実施した。古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居跡が7軒検出され、古代の集落の存在が明らかとなった。令和元・2年度調査には、宅地造成に伴う確認・本調査が実施され、平安時代の木枠の井戸、墨書土器や中世の古銭を500点上埋蔵したピットなどを検出し、長期間にわたって土地利用されていたことがわかった。上湯江は地名から周准郡の「湯坐郷」の地と推定されている。釜神遺跡<sup>(2)</sup>は、小糸川の河道跡であり、近世の溝跡と畦畔が検出された。中富遺跡<sup>(3)</sup>も小糸川の河道跡であるが、中富地区の中心一帯は周囲よりも若干標高が高い



- |           |           |             |              |            |
|-----------|-----------|-------------|--------------|------------|
| 1. 富吉遺跡   | 2. 上湯江遺跡  | 3. 八幡西遺跡    | 4. 八幡前古墳     | 5. 貞元遺跡    |
| ⑥. 貞元塚田古墳 | 7. 釜神遺跡   | 8. 中富遺跡     | 9. 八崎遺跡      | 10. 下湯江陣屋跡 |
| 11. 天神遺跡  | ⑫. 南子安古墳  | ⑬. 南子安子安坂古墳 | ⑭. 寺の前古墳     | ⑮. 下迫古墳    |
| ⑯. 下迫古墳   | ⑰. 馬門古墳   | 18. 子安陣屋跡   | 19. 笠田遺跡     | 20. 花輪堂古墳  |
| 21. 八幡東遺跡 | ⑳. 圭師古墳   | 23. 八幡神社古墳  | 24. 外箕輪遺跡    | 25. 常代遺跡   |
| 26. 郡条里遺跡 | 27. 八幡権現塚 | 28. 郡西遺跡    | 29. 元秋葉台遺跡   | 30. 下荘台遺跡  |
| 31. 下荘台古墳 | 32. 中荘台古墳 | 33. 上野台遺跡   | 34. 上湯江上野台古墳 | 35. 法木作遺跡  |
| 36. 法木作古墳 | 37. 陣所古墳  | 38. 三船台遺跡   | 39. 房総往還     | 40. 下三船古墳  |
| 41. 春日神社塚 | 42. 渡間塚   |             |              |            |
| A. 三船台古墳群 | B. 上野古墳群  | C. 元秋葉台古墳群  | D. 元秋葉台横穴群   |            |

※番号に○印のあるものは、すでに消滅

第1図 富吉遺跡周辺の遺跡 (1/25,000)

ので、遺構が存在している可能性が十分考えられる。南東側約2.0kmに低地遺跡の25. 常代遺跡や26. 郡条里遺跡がある。常代遺跡<sup>(4)</sup>は、弥生時代から中世までの複合遺跡であり、弥生時代中期の方形周溝墓群、河川跡、古墳時代中・後期の集落跡、奈良・平安時代を主とした掘立柱建物跡群などが調査され、河川跡からは多量の木製品が出土している。郡条里遺跡<sup>(5)</sup>では古代条里制と関係のある溝跡や水田跡を確認している。丘陵上には縄文時代から古墳時代の包蔵地である33. 上野台遺跡、石製模造品を伴う祭祀関連の30. 下荘台遺跡<sup>(6)</sup>があるが、報告書未刊行のため詳細は不明である。古墳については、古墳時代後期の群集墳であるC. 元秋葉台古墳群<sup>(7)</sup>や古墳時代終末期のD. 元秋葉台横穴群<sup>(8)</sup>で一部調査が行われており、遺存状態が良好な須恵器などの遺物が出土している。三舟山の麓には、近世の39. 房総往還も所在し、古代から近世までの遺跡が多く残る地域である。

- 註 (1) 『富古遺跡群確認調査報告書』1996 君津市教育委員会  
『平成23年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2012 君津市教育委員会  
『平成26年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2015 君津市教育委員会  
『上湯江遺跡Ⅳ－トマト栽培施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』2019 君津市教育委員会  
『上湯江遺跡Ⅴ－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書－』2022 君津市教育委員会  
『千葉県君津郡君津町誌 後編』1973
- (2) 『富古遺跡群確認調査報告書Ⅱ』1997 君津市教育委員会  
『富古遺跡群確認調査報告書Ⅲ』1998 君津市教育委員会
- (3) 『富古遺跡群確認調査報告書』1996 君津市教育委員会  
『富古遺跡群確認調査報告書Ⅱ』1997 君津市教育委員会
- (4) 『常代遺跡群確認調査報告書』1989 君津市教育委員会  
『常代遺跡群』1996 財団法人君津都市文化財センター  
『常代遺跡Ⅱ』1998 財団法人君津都市文化財センター  
『国道127号 埋蔵文化財調査報告書－君津市常代遺跡六反免地区、郡条里遺跡、郡遺跡(2)、郡遺跡(3)、小山野遺跡－』2004 財団法人千葉県文化財センター
- (5) 『郡条里遺跡確認調査報告書』1988 君津市教育委員会  
『郡条里遺跡発掘調査報告書』1990 君津市教育委員会  
『郡条里遺跡Ⅱ』1992 財団法人君津都市文化財センター  
『郡条里遺跡Ⅲ』1994 財団法人君津都市文化財センター  
『国道127号 埋蔵文化財調査報告書－君津市常代遺跡六反免地区、郡条里遺跡、郡遺跡(2)、郡遺跡(3)、小山野遺跡－』2004 財団法人千葉県文化財センター
- (6) 『千葉県君津郡君津町誌 後編』1973
- (7) 『元秋葉台32号墳発掘調査報告書』1977 君津市教育委員会、貞元・新御堂遺跡発掘調査会
- (8) 『平成6年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1995 君津市教育委員会

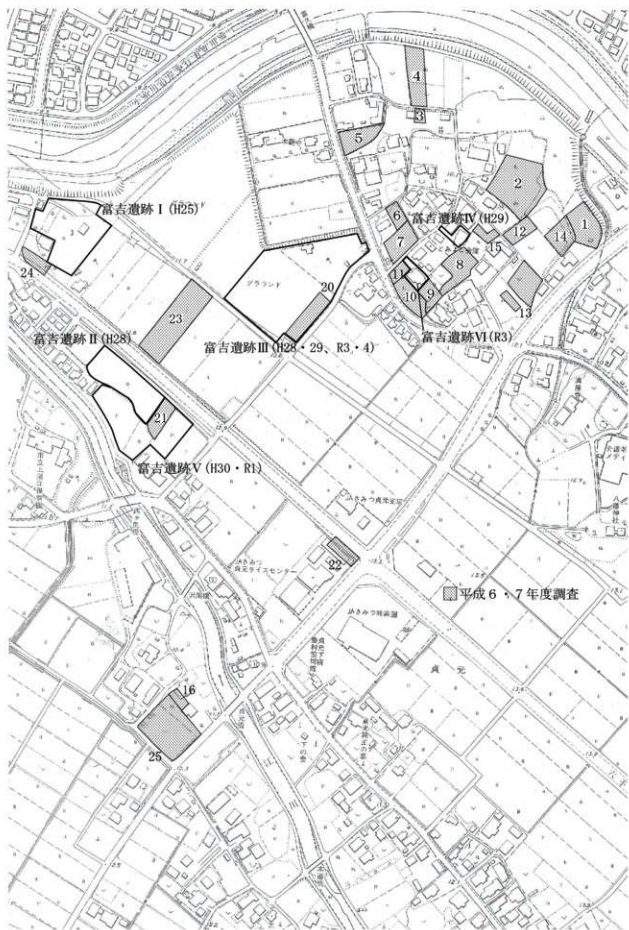
#### 参考文献

『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)－君津・夷隅・安房地区(改訂版)－』2000 千葉県教育委員会

### 3 遺跡の概要(第2図)

富古遺跡は、古墳時代等遺物包蔵地として周知の遺跡であり、平成6・7年度に実施した区画整理に伴う確認調査や平成25年度以降から住宅建設・小規模な宅地造成に伴う調査により、少しずつ遺跡の範囲や性格が明らかとなってきている。君津市貞元土地区画整理組合による区画整理の計画に伴い、平成6・7年度に確認調査<sup>(1)</sup>(No.1～16、No.20～25地点)が22ヶ所実施されている。古墳時代の竪穴住居跡34軒(No.2、No.6～13、No.15地点)、奈良・平安時代の掘立柱建物跡13棟以上(No.2・7・10・13・15地点)、中世の溝跡(No.5地点)





第2図 富吉遺跡調査区位置図 (1/4,000)

などを検出している。小系川に面したNo. 2地点では、古墳時代後期の住居跡のほか、建物配置に規則性のある奈良・平安時代の掘立柱建物跡を検出した。また、井戸と推測される土坑から9世紀代の土師器甕が出土している。No. 5地点で検出された溝跡からは14世紀代の龍泉窯系Ⅲ類の青磁蓮弁碗が出土している。No. 22地点では、古墳の周溝とみられる溝跡の一部が検出された。No. 22地点の東側、事業区域外では埴輪片が表採されている。No. 23地点では、古代末から中世とみられる東西方向の畦畔が2ヶ所検出されている。近年では、平成25年度に確認調査を実施した富吉遺跡Ⅰでは、古墳時代の溝跡11条、土坑1基が検出されている。平成28年度に確認・本調査を実施した富吉遺跡Ⅱ<sup>(2)</sup>では、平成6年度調査のNo. 21地点で検出した溝跡と同一の古墳時代の溝跡やピットを検出した。平成28・29年度に確認調査を実施した富吉遺跡Ⅲでは、古墳時代竪穴住居跡1軒・溝跡24条・土坑10基、奈良・平安時代掘立柱建物跡3棟などが検出され、集落の広がりを確認した。平成29年度に確認・本調査を実施した富吉遺跡Ⅳ<sup>(3)</sup>では、古墳時代溝跡1条・土坑2基、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒・溝跡2条を検出した。平成30年度に確認・本調査を実施した富吉遺跡Ⅴ<sup>(4)</sup>では、古墳時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物を検出し、遺跡の南端が明らかとなった。

注(1)『富吉遺跡群確認調査報告書』1996 君津市教育委員会

(2)『富吉遺跡Ⅱ』2017 君津市教育委員会

(3)『平成30年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2019 君津市教育委員会

(4)『富吉遺跡Ⅴ』2019 君津市教育委員会

#### 4 調査の方法(第3・4図)

確認調査は調査対象地内における遺構の分布と種別を把握するために対象地551.9㎡にトレンチを4本設定した。調査区域の現状は宅地である。調査を実施するにあたり、公共座標に基づく基準点測量は専門業者が行い、この杭を用いて現地での平面図・断面図などの実測作業を行った。写真撮影は小型(35mm)カメラを使用し、カラーリバーサルフィルムを使用した。遺構確認面までの表土は重機により除去した後、鶴簾を用いて人力により遺構検出作業を行った。基本層序は1T北壁(A-A')と3T南壁(B-B')で確認し、現地表面から確認面までは、0.5～1.2mである。地山層は黄白色粘質土(Ⅲ層)である。遺構検出作業時に出土した遺物は、トレンチ一括で取り上げた。調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピットが検出されたため、事業者と君津市教育委員会生涯学習文化課とで再度協議を行い、埋蔵文化財をどうしても保存することができない137.9㎡の本調査を行うこととした。

本調査では、排土置場を確保するため調査区域をA区、B区の2区画に分けて、A区→B区の順にスイッチバック方式で調査を行った。遺構番号は、本調査区全体で通し番号を付した。遺構確認面までの表土は重機により除去し、本調査範囲の遺構検出作業、覆土掘り下げは人力で行った。出土した遺物は遺構ごとに取り上げた。写真撮影は小型(35mm)カメラを使用し、カラーリバーサルフィルムを使用した。調査終了後は重機により排土を埋め戻して現状復帰し、現地作業を終了した。

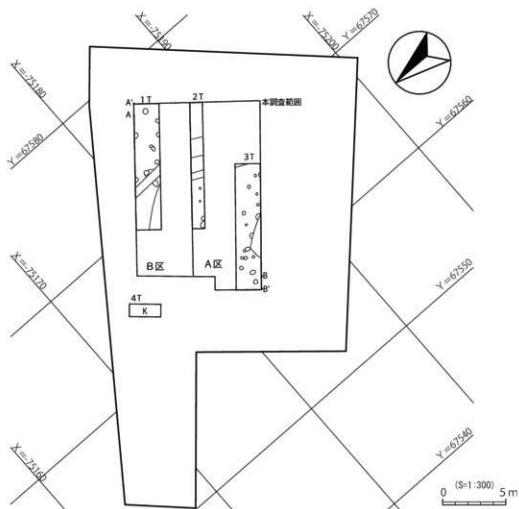


第3図 富吉遺跡VI基本土層図

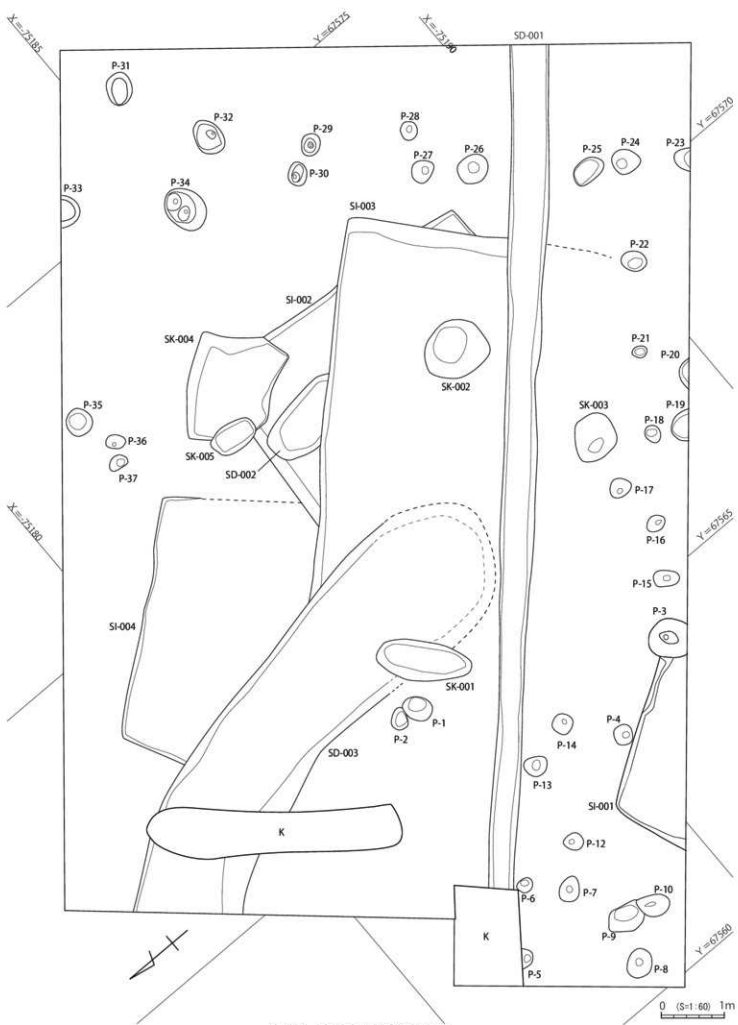
#### 4 検出した遺構と遺物

##### 確認調査（第3・4図）

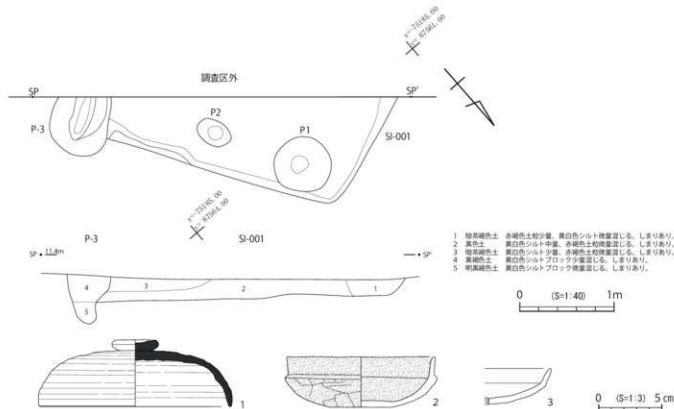
- 1 T 遺構確認面までの深さは、0.5 mである。古墳時代溝跡2条・土坑1基・ピット10基を検出した。
- 2 T 遺構確認面までの深さは、1.2 mである。古墳時代溝跡2条・ピット4基を検出した。
- 3 T 遺構確認面までの深さは、0.8 mである。古墳時代住居跡1軒・溝跡1条・ピット17基を検出した。
- 4 T 攪乱で、遺構は検出されなかった。



第4図 富吉遺跡VI確認トレンチ配置図



第5図 富吉遺跡VI遺構配置図



第6図 SI-001 実測図

## 本調査（第5～11図）

### 竪穴住居跡

#### SI-001（第5・6図）

重複関係 SI-001→P-3

**規模・形態・構造** 検出部分が一部で角をP-3に切られているが、一辺は3m以内であると考えられる。深さ0.16～0.26mである。平面形は正方形が想定される。検出された壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。柱穴はP1・2を検出した。P1は直径0.6m、深さ0.24m。P2は長軸0.38m、短軸0.26m、直径0.3m、深さ0.25m。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

**遺物** 土師器、須恵器が出土した。1は須恵器蓋で2/3の遺存である。口径15.0cm、器高5.3cm、ロクロ成形。ボタン状ツマミ貼り付け。上部は回転ヘラケズリ。焼成は良好。色調は灰色。胎土は砂粒、白色粒を含む。

2・3は土師器坏である。2は口縁部～底部1/5の遺存である。復元口径11.7cm、器高4.0cm。調整は内面ヘラナゲ。外面口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ。内外面ともに赤彩を施す。焼成は良好。色調は橙色。胎土は細かい砂粒、小礫を含む。

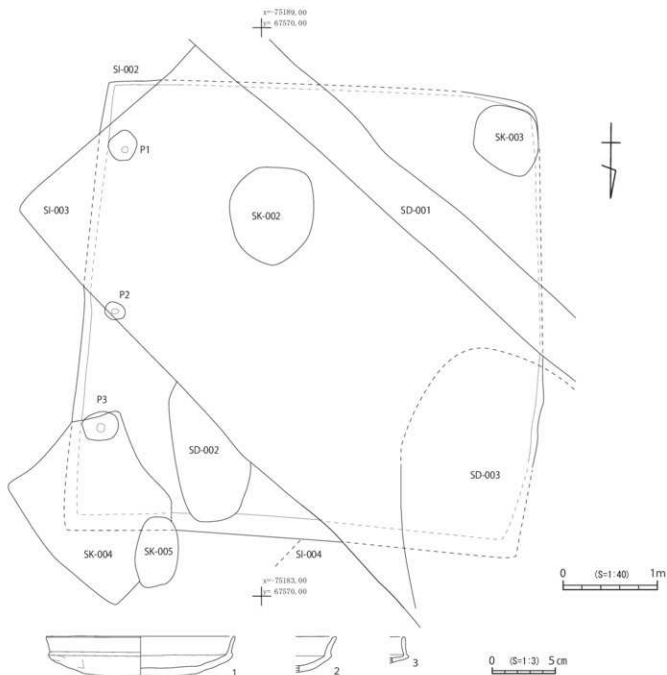
3は口縁部～底部1/8の遺存である。遺存高2.8cm。調整は内面ミガキ。外面口縁部ヨコナゲ、体部～底部摩擦激しく調整不明。焼成はやや不良。色調は橙色。胎土は砂粒、石英、白色粒を含む。

#### SI-002（第5・7図）

重複関係 SI-004→SI-002→SD-002→SI-003→SD-001・003、SK-002・003

SI-002→SK-004→SK-005

**規模・形態・構造** 一辺4.5～4.76m、深さ0.36mである。平面形は正方形である。遺構全体が他の遺構により削平され、検出された壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で、硬

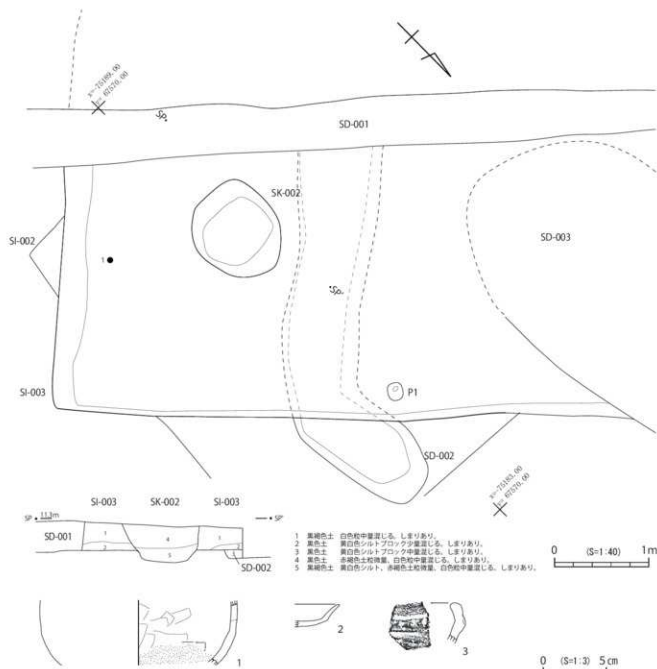


第7図 S1-002 実測図

化面は検出されなかった。柱穴はP1～3を検出した。P1は直径0.28 m、深さ0.12 m。P2は直径0.2～

0.22 m、深さ0.17 m。P3は直径0.31～0.38 m、深さ0.24 m。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

**遺物** 土師器が出土した。1～3は土師器片である。1は口縁部～底部1/6の遺存である。復元口径14.8 cm、器高3.2 cm。調整は内面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。焼成は良好。色調はにぶい黄橙色、外面口縁部～体部にかけて一部黒色。胎土は細かい砂粒、白色粒、小礫を含む。2は口縁部～底部1/8の遺存である。遺存高2.8 cm。調整は内面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。焼成は良好。色調は内面浅黄橙色、外面にぶい黄橙色、体部の一部黒色。胎土は砂粒、白色粒を含む。3は口縁部～底部1/8の遺存である。遺存高2.2 cm。調整は内面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。焼成は良好。色調は内面橙色、外面浅黄橙色。胎土は赤褐色粒、細かい砂粒を含む。



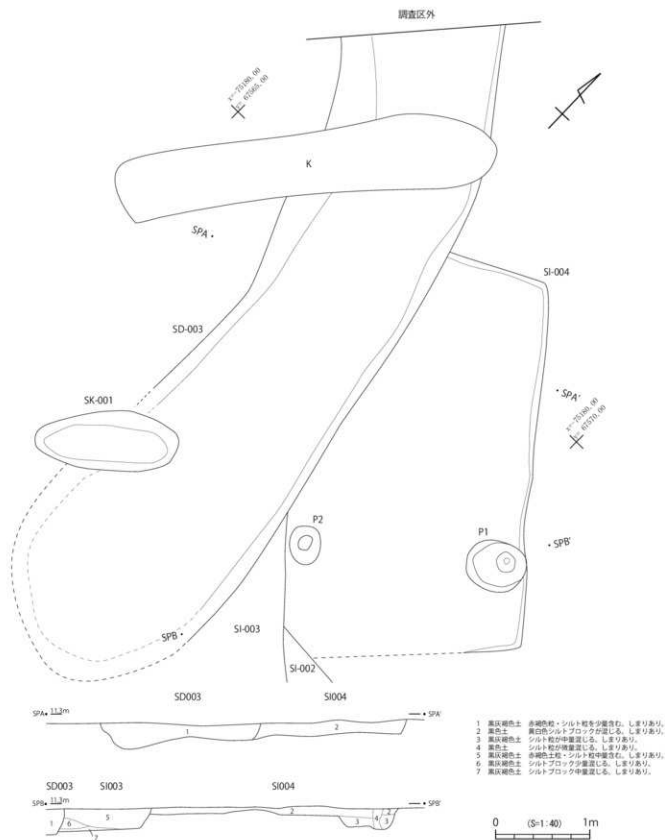
第8図 SI-003 実測図

SI-003 (第5・7～9図)

重複関係 SI-004→SI-002→SD-002→SI-003→SD-001・003、SK-002

規模・形態・構造 一部のみの検出で、検出部分の一辺6.18m、深さ0.26～0.3mである。平面形は正方形が想定される。遺構上部は、大きく削平を受けていると考えられ、SD-001の南西側では遺構の検出はされなかった。検出された壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。柱穴はP1を検出した。P1は直径0.16～0.18m、深さ0.3m。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

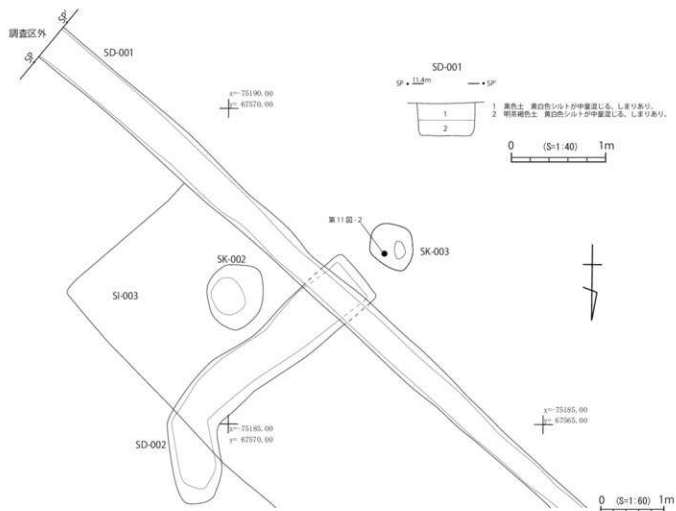
遺物 縄文土器、土師器が出土した。1は土師器甕の胴部2/3の遺存である。遺存高5.2cm。調整は内面ヘラナゲ、スス付着。外面摩耗激しく調整不明。焼成はやや不良。色調はにぶい黄橙色、外面橙色。胎土は赤色粒、白色粒、砂粒、小礫を含む。2は土師器坏で口縁部～底部片である。遺存高1.9cm。調整は内



第9図 SI-004及びSD-003遺構実測図

面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。焼成は良好。色調は内面橙色、外面明黄褐色。胎土は細かい砂粒を含む。3は縄文土器の浅鉢の口縁部片である。調整は内面ミガキ。外面沈線に並行して竹管文を施す。焼成は良好。色調はにぶい褐色。胎土は砂粒、黒石英を含む。





第10図 SD-001・002及びSK-002・003遺構実測図

#### SI-004 (第5・9図)

重複関係 SI-004→SI-002→SI-003→SD-003→SK-001

規模・形態・構造 一辺3.8～4.2m、深さ0.04～0.13mである。平面形は正方形が想定される。遺構の1/2は、他の遺構により削平を受けている。検出された壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。柱穴はP1・2を検出した。P1は長軸0.63m、短軸0.52m、深さ0.19m。柱痕を検出した。P2は長軸0.4m、短軸0.33m、深さ0.2m。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 土師器が出土した。小片のため図示し得るものはない。

#### 溝跡

##### SD-001 (第5・7・8・10図)

重複関係 SI-002→SI-003→SD-001

規模・形態・構造 幅0.4～0.65m、深さ0.27～0.35m、検出部分の長さは13.5m。南東―北西方向に走る溝で、断面形は箱状である。

遺物 土師器が出土した。小片のため図示し得るものはない。

#### SD-002 (第5・7・8・10図)

重複関係 SI-002 → SD-002 → SI-003 → SD-001

規模・形態・構造 幅0.75～0.95 m、深さ0.13 m、長さ4.8 m。南西―北東方向に走り、北方向に曲がる溝で、断面形は皿状である。

遺物 土師器が出土した。小片のため図示し得るものはない。

#### SD-003 (第5・7～9・11図)

重複関係 SI-004 → SI-002 → SI-003 → SD-003 → SK-001

規模・形態・構造 幅1.7～1.9 m、深さ0.14～0.28 m、検出部分の長さは6.56 m。南東―北方向に走る溝で、断面形は皿状である。

遺物 土師器、須恵器が出土した。土師器は高坏や坏などが含まれる。1は土師器甕の口縁部片である。遺存高4.3 cm。摩耗激しく調整不明。焼成は不良。色調は橙色。胎土は砂粒、赤色粒、小礫を含む。

### 土坑

#### SK-001 (第5・9図)

重複関係 SD-003 → SK-001

規模・形態・構造 長軸1.52 m、短軸0.63 m、深さ0.1 m。平面形は楕円形である。断面形はU字状である。

遺物 土師器が出土した。甕の胴部片などが含まれるが小片のため図示し得るものはない。

#### SK-002 (第5・7・8・10図)

重複関係 SI-002 → SI-003 → SK-002

規模・形態・構造 直径0.98～1.4 m、深さ0.37 m。平面形は不整な円形である。断面形はU字状である。

遺物 土師器が出土した。小片のため図示し得るものはない。

#### SK-003 (第5・7・10・11図)

重複関係 SI-002 → SI-003 → SK-003

規模・形態・構造 直径0.66～0.78 m、深さ0.24 m。平面形は不整な円形である。断面形はU字状である。

遺物 土師器が出土した。2～3は土師器坏である。2は1/3の遺存である。復元口径14.0 cm、遺存高4.1 cm。調整は内面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面・外面口縁部に赤彩を施す。焼成は良好。色調はにぶい黄橙色。胎土は細かい砂粒、赤色粒を含む。3は口縁部～底部1/8の遺存である。遺存高2.6 cm。調整は内面ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ。焼成は良好。色調は浅黄橙色。胎土は細かい砂粒、黒色土を含む。3は土師器甕の底部1/4の遺存である。復元底径6.5 cm、遺存高3.8 cm。調整は内面ヘラケズリ。外面胴部ヘラケズリ。焼成は良好。色調は橙色。胎土は白色粒を含む。

#### SK-004 (第5・7図)

重複関係 SI-002 → SK-004 → SK-005

規模・形態・構造 長軸1.75 m、短軸1.3～1.45 m、深さ0.44 m。平面形は不整な長方形である。断面形は箱状である。

遺物 土師器が出土した。小片のため図示し得るものはない。

## SK-005 (第5・7図)

重複関係 SI-002 → SK-004 → SK-005

規模・形態・構造 長軸0.75 m、短軸0.45 m、深さ0.16 m。平面形は長方形である。断面形は箱状である。

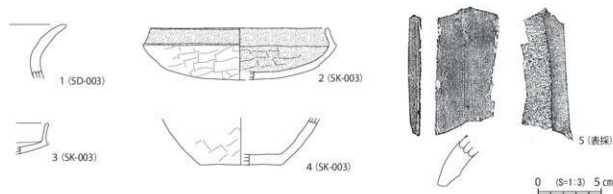
遺物 なし

## ピット

一覧表にまとめた。出土遺物についても表中に記載したが、いずれも小片で図示し得るものはなかった。

遺構	重複関係	規模	平面形	柱状の有無	出土遺物	備考
P-1	P-1→P-2	長軸0.49 m、短軸0.27 m、深さ0.21 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-2	P-1→P-2	長軸0.30 m、短軸0.27 m、深さ0.16 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-3	P1-001→P-3	掘出部分の高さ0.63 m、深さ0.6 m	円形	無		第5・6図
P-4		一辺0.32 m、深さ0.29 m	方形	無	土師器	第5図
P-5		掘出部分の高さ0.22 m、深さ0.16 m	円形	無	土師器	第5図
P-6		深さ0.20 m、深さ0.20 m	正方形円形	無		第5図
P-7		長軸0.47 m、短軸0.23 m、深さ0.24 m	楕円形	無		第5図
P-8		長軸0.42 m、短軸0.20 m、深さ0.22 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-9	P-9→P-10	掘出部分の高さ0.63 m、短軸0.49 m、深さ0.67 m	不整形方形	無		第5図
P-10	P-9→P-10	長軸0.32 m、短軸0.25 m、深さ0.42 m	楕円形	無	土師器、土師土	第5図
P-12		長軸0.32 m、短軸0.20 m、深さ0.22 m	楕円形	無		第5図
P-13		長軸0.27 m、短軸0.22 m、深さ0.22 m	楕円形	無		第5図
P-14		深さ0.20 m、深さ0.17 m	不整形円形	無		第5図
P-15		長軸0.4 m、短軸0.25 m、深さ0.2 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-16		長軸0.27 m、短軸0.21 m、深さ0.17 m	楕円形	無		第5図
P-17		長軸0.42 m、短軸0.20 m、深さ0.19 m	楕円形	無		第5図
P-18		長軸0.29 m、短軸0.24 m、深さ0.17 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-19		掘出部分の高さ0.29 m、深さ0.19 m	円形	無		第5図
P-20		掘出部分の高さ0.21 m、深さ0.19 m	円形	無		第5図
P-21		長軸0.25 m、短軸0.21 m、深さ0.22 m	楕円形	無		第5図
P-22		長軸0.41 m、短軸0.21 m、深さ0.20 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-23		掘出部分の高さ0.27 m、深さ0.24 m	円形	無		第5図
P-24		長軸0.40 m、短軸0.4 m、深さ0.32 m	楕円形	無		第5図
P-25		長軸0.34 m、短軸0.34 m、深さ0.2 m	楕円形	無	土師器、鉄片4g	第5図
P-26		長軸0.22 m、短軸0.41 m、深さ0.21 m	楕円形	無		第5図
P-27		長軸0.20 m、短軸0.24 m、深さ0.41 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-28		深さ0.20 m、深さ0.29 m	不整形円形	無	土師器	第5図
P-29		長軸0.20 m、短軸0.21 m、深さ0.40 m	楕円形	有		第5図
P-30		長軸0.20 m、短軸0.2 m、深さ0.2 m	楕円形	有		第5図
P-31		長軸0.2 m、短軸0.24 m、深さ0.20 m	楕円形	無	土師器	第5図
P-32		長軸0.20 m、短軸0.44 m、深さ0.22 m	楕円形	有	土師器	第5図
P-33		掘出部分の高さ0.2 m、深さ0.40 m	円形	無	土師器	第5図
P-34		長軸0.25 m、短軸0.20 m、深さ0.41 m	楕円形	有		第5図
P-25		深さ0.42 m、深さ0.1 m	円形	無	土師器	第5図
P-36		長軸0.22 m、短軸0.22 m、深さ0.20 m	楕円形	無		第5図
P-37		長軸0.22 m、短軸0.24 m、深さ0.16 m	楕円形	無		第5図

表1 富吉遺跡VIピット観察表



第11図 その他出土遺物実測図

## 遺構外出土遺物（第11図）

土師器、須恵器などが出土した。5は、丸瓦である。凸面ヘラナデ。凹面布目痕、側縁ヘラケズリ。側面ヘラケズリ。厚さ0.4～0.8cm。重さ104.05g。焼成は良好。色調は灰白色。胎土は細かい砂粒、小礫を含む。

## 5 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、溝跡3条、土坑5基、ピット36基である。主な時代は古墳時代後期である。遺物は土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片が多く、土師器に比べ、須恵器の数量は極めて少ない。

遺構には伴わなかったものの、奈良・平安時代の瓦が出土した。これまでの周辺の調査で富吉遺跡No.16地点・No.23地点、上湯江遺跡IV、Vでも瓦が出土している。しかし、数量は少なく、転用されているものが多い。

また、遺構は検出されなかったが縄文土器が出土したことから、縄文時代の遺構が付近に存在する可能性もある。

調査地点の現表面はほぼ同じ標高であったが、確認面は東から西にかけてゆるやかに傾斜している。また、表土から確認面までの間の堆積が1層のみであること、SI-004では上部が削られ遺構がほとんど遺存していないことから確認面上部が削平され、盛土されていると考えられる。

これまでの調査で、富吉遺跡内北側の微高地に古墳時代後期の集落の存在が示されてきた。今回の調査でもそれを裏付ける調査成果となった。当該区域内の調査は確認調査が主であるため、より詳細な集落の範囲などについては、今後の調査に期待したい。

## 第2章 戸崎城山遺跡32地点

### 1 調査にいたる経緯

令和4年4月12日付けで、個人申請者より文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出があった。開発目的は個人住宅建設で、開発予定面積は551.84㎡である。開発区域は「周知の埋蔵文化財包蔵地内（戸崎城山遺跡・戸崎古墳群）」で、開発着手前に確認調査を実施する必要がある旨を事業者に説明した。協議の結果、計画どおり事業を行うことになり、遺跡の規模及び性格を把握するための確認調査を実施することとした。確認調査は、令和4年6月3日から同年6月10日まで、君津市教育委員会で行った。

確認調査の結果、古墳の周溝や古墳時代溝跡が検出されたため、事業者と市教育委員会生涯学習文化課とで再度協議を行い、埋蔵文化財をどうしても保存することができない2.2㎡について、本調査を行うこととした。本調査は、令和4年6月13日から同年6月21日まで行った。なお、調査はすべて君津市教育委員会で行った。

### 2 地理的・歴史的環境（第12図）

戸崎城山遺跡・戸崎古墳群は、君津市戸崎に所在し、JR久留里線小櫃駅の南西約1.9km地点にある。小櫃川中流域左岸に形成された河岸段丘上に位置し、標高は約30～60m前後である。

発掘調査がされた周辺の遺跡をみると、39. 戸崎陣屋前遺跡<sup>(1)</sup>では古墳時代中期の竪穴住居跡（以下住居跡）7軒・溝跡1条が確認されており、石製模造品などが出土している。26. 岩出遺跡<sup>(2)</sup>では縄文時代前期の住居跡3軒、弥生時代後期の住居跡3軒、古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡21軒が検出された。21. 野中遺跡<sup>(3)</sup>では古墳時代後期の住居跡7軒が検出されている。22. 寺沢出戸遺跡<sup>(4)</sup>では古墳時代前期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡15軒、平安時代の住居跡1軒が検出されている。富田遺跡群内<sup>(5)</sup>では、33. 国光遺跡、34. 上ノ山遺跡、35. 菩提遺跡の3遺跡が調査されている。国光遺跡では古墳時代後期の円墳2基、上ノ山遺跡では古墳時代前期の住居跡5軒・土坑4基・溝跡3条が検出された。住居跡のなかには、ベッド状遺構を有する大型住居跡もみられる。菩提遺跡では古墳時代後期の住居跡4軒、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、溝跡14条、道路跡6条、炭窯2基と古墳時代から昭和期にかけての遺構が調査された。小櫃川中流域右岸をみると15. 上新田張山遺跡<sup>(6)</sup>では古墳時代後半の溝跡や11世紀中頃から13世紀前半頃のピット群、井戸跡などが検出されている。16. 青柳向台遺跡<sup>(7)</sup>では弥生時代後期の壺棺墓が出土しているほか、古墳時代後半の溝跡1条、奈良時代の住居跡3軒、中世の掘立柱建物跡3棟などが検出されている。37. 青柳西の前遺跡<sup>(8)</sup>では古墳時代後期の住居跡が61軒確認されており、この地域では該期の最大級の集落跡であることが明らかとなっている。36. 青柳宮ノ前遺跡<sup>(9)</sup>では古墳時代後期の溝跡が1条検出されている。古墳については、多くの古墳が群集して分布しており、小櫃地区だけで総数350基以上が確認されている。古墳時代前期の100m級の前方後円墳であるA. 白山

神社古墳、B. 箕輪浅間神社古墳、C. 飯籠塚古墳は「小櫃の三大古墳」といわれ、小櫃川を挟んで対峙するように位置しており、小櫃川流域を支配した首長層の墳墓と考えられている。これらの前方後円墳については、学術的な発掘調査が行われていないため個々の年代や築造の前後関係は不明であるが、墳丘の形状からは前期古墳と位置付けられている。古墳時代中期以降になると首長系墳墓である大型前方後円墳は、小櫃川下流域に群在しており、首長層勢力が内陸部から海岸部へと移動したことを示している。しかしながら、古墳時代中期から後期にかけて形成された古墳群が、戸崎古墳群周辺では、小櫃川左岸に4. 峯・25. 岩出・23. 出戸・31. 瓜倉原古墳群、右岸には10. 長谷川・13. 上新田古墳群があり、小櫃川流域首長の本拠地が下流域へ移動した後も、中・上流域における重要拠点の一つを形成していたことは明らかである。系譜的な関連を考えるうえで注目される地域である。

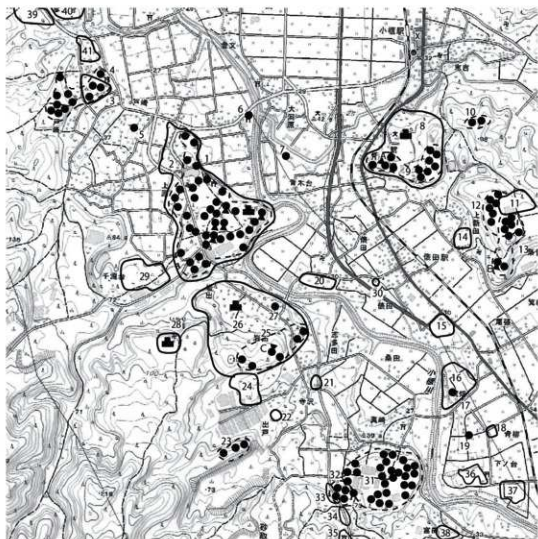
- 註 (1) 『年報 No. 15』1998 財団法人君津都市文化財センター  
 (2) 『君津市岩出遺跡・岩出城跡』1986 財団法人千葉県文化財センター  
 (3) 『年報 No. 4』1986 財団法人君津都市文化財センター  
 (4) 『寺沢出戸遺跡』1998 財団法人君津都市文化財センター  
 『平成20年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2009 君津市教育委員会  
 (5) 『富田遺跡群』1987 財団法人君津都市文化財センター  
 (6) 『平成8年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1997 君津市教育委員会  
 『平成9年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1998 君津市教育委員会  
 『国道道路改築委託(久留里)埋蔵文化財調査報告書2  
 -君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡-』2007 財団法人千葉県教育振興財団  
 (7) 『青柳向台遺跡発掘調査報告書』1983 財団法人君津都市文化財センター  
 『国道道路改築委託(久留里)埋蔵文化財調査報告書2  
 -君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡-』2007 財団法人千葉県教育振興財団  
 (8) 『青柳西の前遺跡-遺構確認調査報告書-』1982 青柳西の前遺跡発掘調査会  
 (9) 『青柳宮ノ前遺跡-発掘調査報告書-』1981 青柳宮ノ前遺跡発掘調査会

#### 参考文献

『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)-君津・夷隅・安房地区(改訂版)-』2000 千葉県教育委員会

### 3 遺跡の概要(第13図)

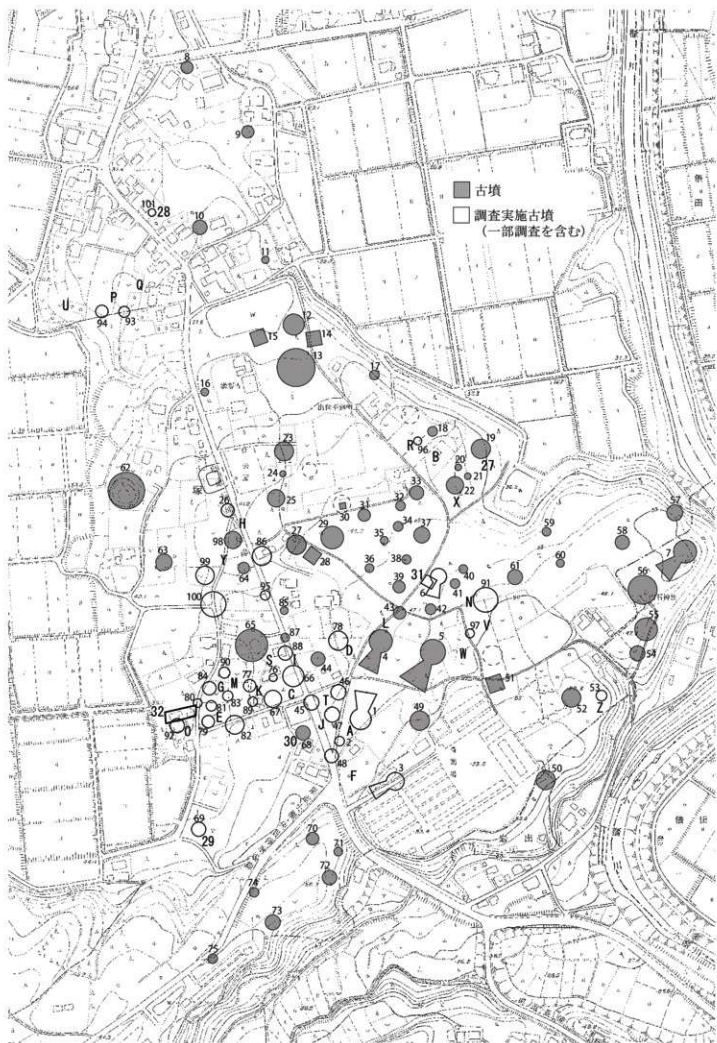
戸崎城山遺跡は、縄文時代から古墳時代にかけての包蔵地と、前方後円墳6基を含む100基以上の古墳で構成される戸崎古墳群、そして中世に築城された戸崎城跡を包括している複合遺跡である。本遺跡内では、昭和57年(1982年)以降、住宅建設に伴う点的な小規模調査や県道拡幅に伴う線の発掘調査が毎年のように実施され、その積み重ねが遺跡の性格と時期を知る重要な手がかりとなっている<sup>(1)</sup>。これま



- |               |                |            |             |             |
|---------------|----------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 戸崎古墳群      | 2. 戸崎城山遺跡・戸崎城跡 | 3. 追場遺跡    | 4. 峯古墳群     | 5. 下台古墳     |
| 6. 森下古墳       | 7. 芝塚          | 8. 館ノ内城跡   | 9. 白山神社古墳群  | 10. 長谷川古墳群  |
| 11. 上原遺跡      | 12. 上新田塚群      | 13. 上新田古墳群 | 14. 前畑遺跡    | 15. 上新田張山遺跡 |
| 16. 青柳向台遺跡    | 17. 向台塚        | 18. 青柳下原遺跡 | 19. 鏡畑塚     | 20. 儀田山王松遺跡 |
| 21. 野中遺跡      | 22. 寺沢出戸遺跡     | 23. 出戸古墳群  | 24. 寺沢遺跡    | 25. 岩出古墳群   |
| 26. 岩出遺跡・岩出城跡 | 27. 念仏塚古墳      | 28. 破台館跡   | 29. 廻の腰遺跡   | 30. 儀田荒久遺跡  |
| 31. 瓜倉原古墳群    | 32. 国光古墳群      | 33. 国光遺跡   | 34. 上ノ山遺跡   | 35. 菩提遺跡    |
| 36. 青柳宮ノ前遺跡   | 37. 青柳西の前遺跡    | 38. 富田田面遺跡 | 39. 戸崎降屋前遺跡 | 40. 降屋台遺跡   |
| 41. 峯遺跡       |                | A. 白山神社古墳  | B. 箕輪浅間神社古墳 | C. 飯籠塚古墳    |

第12図 戸崎城山遺跡周辺の遺跡 (1 : 25,000)

での調査成果では、主に弥生時代の方形周溝墓、古墳時代中期の堅穴住居跡、奈良時代の堅穴住居跡、平安時代の方形区画墓・溝状遺構、中世の土坑墓などが検出されている。戸崎古墳群については、墳丘の調査例は、6号墳(前方後円墳、前方部墳丘一部を調査)、46・47号墳(円墳、墳丘本調査)、53号墳(円墳、本調査)、68号墳(円墳、墳丘本調査)の5例と少なく、墳丘が既に削平され消滅した周溝のみの調査例が多い。そのため、埋葬施設の調査例も少ないが、調査した埋葬施設から白色粘土が検出されることから、木棺直葬などが推定される。これまでの調査の結果、墳丘下で古墳時代中期の堅穴住居跡が検出されることから、古墳の多くは6世紀代を中心とする後期古墳と考えられている。古墳時代中期の集落が廃絶した後、墓域として利用されていたことを示している。今後も墳丘が消滅している古墳の発見が、増加



第13図 戸崎古墳群分布図 (1:4,000)



していくと思われる。

本遺跡内での調査は、これまでにA～31地点で実施した。地点名は基本的に調査順に付しているため、各地点は散在している。これまでAから調査順に付してきたが、平成21年度にアルファベットの26番目「Z」まで終了したため、以後は数字の「27」から順次地点名を付すこととした。

平成29年度に本調査を実施した31地点は、遺跡内のほぼ中央部に位置し、戸崎6号墳を含んでいる。平成6年度には、戸崎6号墳の前方部東側の本調査が実施され、盛土と周溝を検出し6号墳の規模が明らかになった。また、中世の塚・火葬土坑、近世の土坑墓や、墳丘下からは弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の耕作痕が検出された。近年では、これまで前方後円墳とされていた戸崎7号墳が墳丘測量調査によって墳丘長44mの前方後方墳であるという説も示されている<sup>(2)</sup>。その場合、戸崎古墳群の中で戸崎7号墳は、古い段階で築造されたと考えられる。

注 (1) A地点『祝崎古墳群／戸崎城山遺跡発掘調査報告書』1984 財団法人君津都市文化財センター

B地点『平成2年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1991 君津市教育委員会

C地点『戸崎城山遺跡C地点』1993 財団法人君津都市文化財センター

C～G地点『平成4年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1993 君津市教育委員会

H～J地点『千葉県文化財センター年報No.19-平成5年度-』1994 財団法人千葉県文化財センター

K・L地点『平成5年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1994 君津市教育委員会

M地点『戸崎城山遺跡M地点』1994 財団法人君津都市文化財センター

N・O地点、戸崎古墳群6号墳『平成6年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1995 君津市教育委員会

P・Q地点『平成7年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1996 君津市教育委員会

R地点『平成8年度君津市内遺跡発掘調査報告書』1997 君津市教育委員会

S・T地点、戸崎古墳群『平成12年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2001 君津市教育委員会

U地点『平成15年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2004 君津市教育委員会

V地点『平成16年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2005 君津市教育委員会

W地点『平成17年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2006 君津市教育委員会

X地点『平成19年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2008 君津市教育委員会

Y地点『戸崎城山遺跡Y地点』2008 君津市建設部・君津市教育委員会

Z・27地点『平成21年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2010 君津市教育委員会

Z地点(2)『平成23年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2012 君津市教育委員会

28地点『戸崎城山遺跡28地点』2013 君津市教育委員会

30地点『平成28年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2017 君津市教育委員会

31地点『令和元年度君津市内遺跡発掘調査報告書』2020 君津市教育委員会

(2) 酒巻忠史「坪井正五郎・柴田常忠と戸崎の古墳—明治期における君津市小櫃地区での古墳調査—」『日本考古学史研究 第7号』2019 日本考古学史学会。

この他、アルファベットの地点名を付さないが、(財)千葉県文化財センターが発掘調査を実施している。

- ア『千葉県文化財センター年報 No. 20-平成6年度-』1995 財団法人千葉県文化財センター  
イ『千葉県文化財センター年報 No. 23-平成9年度-』1999 財団法人千葉県文化財センター  
ウ『千葉県文化財センター年報 No. 24-平成10年度-』1999 財団法人千葉県文化財センター  
エ『千葉県文化財センター年報 No. 26-平成12年度-』2001 財団法人千葉県文化財センター

#### 参考文献

『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)―君津・夷隅・安房地区(改訂版)―』2000 千葉県教育委員会

## 4 調査の方法(第14図)

確認調査は対象地内における遺構の分布と種別を把握するため、対象地 551.84 m<sup>2</sup> にトレンチを5本設定した。調査区域の現状は宅地である。調査を実施するにあたり、公共座標に基づく基準点測量は専門業者が行い、この杭を用いて現地での平面図・断面図などの実測作業を行った。写真撮影は小型(35mm)カメラを使用し、カラーリバーサルフィルムを使用した。遺構確認面までの表土を重機で除去した後、鋤鎌を用いて人力により遺構検出作業を行った。基本層序は、2 T 北西壁で確認し、現地表面から確認面までは0.2～0.5 mである。地山層は黄褐色砂質土(Ⅲ層)である。

調査の結果、古墳時代円墳の周溝・溝跡が検出されたため、事業者と市教育委員会生涯学習文化課とで再度協議を行い、埋蔵文化財をどうしても保存することができない2.2 mの本調査を行うこととした。遺構確認面までの表土は重機により除去し、遺構検出作業と覆土の掘り下げは人力で行った。写真撮影は小型(35mm)カメラを使用し、カラーリバーサルフィルムを使用した。調査終了後は重機により排土を埋め戻して現状復帰し、現地作業を終了した。

## 5 調査成果

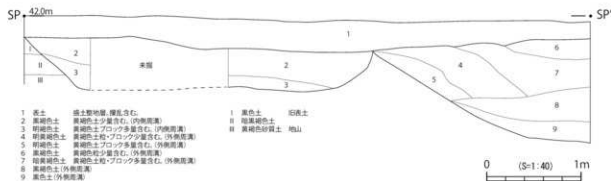
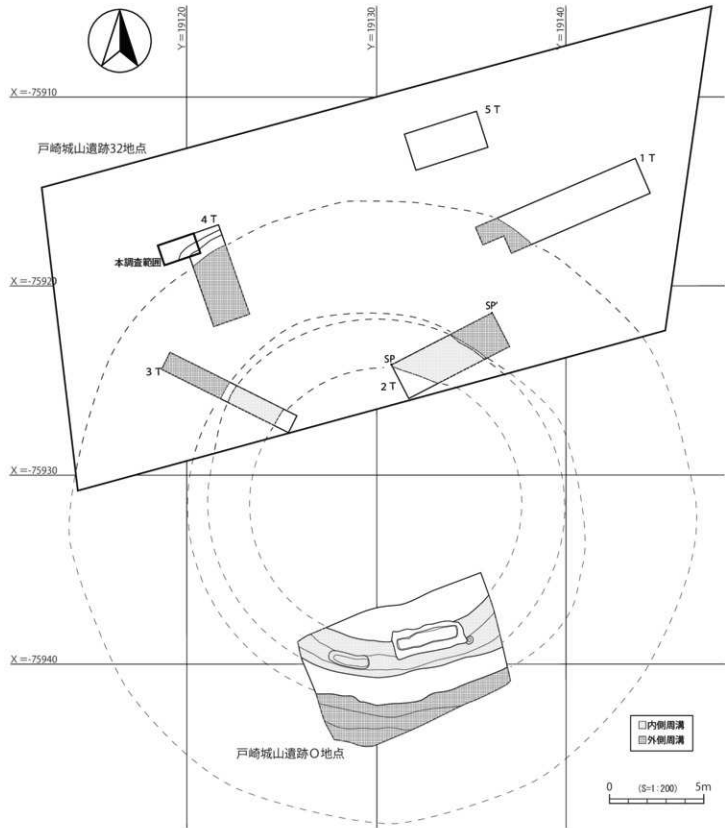
### 確認調査(第14・15図)

- 1 T 遺構確認面までの深さは、0.3 mである。92号墳の外側周溝を検出した。
- 2 T 遺構確認面までの深さは、0.2 mである。92号墳の外側・内側周溝を検出した。
- 3 T 遺構確認面までの深さは、0.5 mである。92号墳の外側・内側周溝を検出した。
- 4 T 遺構確認面までの深さは、0.5 mである。92号墳の外側周溝、古墳時代の溝跡1条を検出した。
- 5 T 遺構確認面までの深さは、0.5 mである。遺構は検出されなかった。

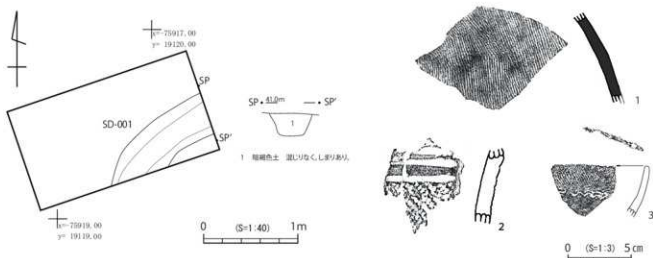
### 遺構(第14・15図)

#### 92号墳

今回の調査では、周溝を2条確認した。上部は大きく削平を受けていたが、サブトレンチを入れた2 T



第14図 戸崎城山遺跡32地点トレンチ配置図及び2T断面図



第15図 戸崎城山遺跡32地点本調査及び出土遺物実測図

では、現表土の直下で旧表土と考えられる黒色土層が検出された。

平成6年度に実施した戸崎城山遺跡O地点調査で同一古墳の調査を実施しているが、その際に検出した2条の周溝について1～4Tで確認した。2Tで両周溝を検出したため、サブトレンチを入れて深さと形態を確認した。

**内側周溝** 今回とO地点の調査結果から周溝の内径が約14.0m、外径が約18.5mの円墳が想定される。周溝の形態は、幅2.0～2.4m、検出した最深部が標高41.19mで、検出した旧表土上面からの比高差約0.6mである。壁面の両側はゆるやかな傾斜で、周溝底面は平坦であると考えられる。O地点で検出した内側周溝は地山上面から幅2.7m、深さは最深部で約1.3mで、周溝底の標高は約40.0mである。壁面は墳丘側はゆるやかな傾斜で、外側はほぼ垂直に立ち上がる形態をもつ。

**外側周溝** 今回とO地点の調査結果から周溝の内径が約20.0m、外径が約33.0mの円墳が想定される。周溝の形態は、幅6.5m、検出した最深部が標高40.64mで、検出した旧表土上面からの比高差約1mである。壁面は墳丘側はゆるやかな傾斜を確認した。O地点で検出した外側周溝は地山上面からの深さは最深部で約0.7mで、周溝底の標高は約40.5mである。一部のみの調査のため形態は明らかになっていない。

**遺物** 縄文土器、弥生土器、土師器である。土師器は小片のため図示し得るものはなかった。

## 溝跡

### SD-001

**重複関係** なし

**規模・形態・構造** 幅0.38～0.43m、深さ0.24m、検出部分の長さは4Tで確認した部分を含めて2.4m。

南一東方向に92号墳の外側周溝に並行して走る溝で、断面形は逆台形状である。

**遺物** なし

## 出土遺物（第15図）

出土遺物は少なく、いずれも3 Tからの出土である。2・3は92号墳の周溝覆土から出土した。

1は須恵器甕の胴部片である。調整は内面ヨコ方向ヘラケズリ。外面平行タタキ。焼成は良好。色調は灰白色。胎土は黒色粒、砂粒を含む。2は縄文土器で加曾利E式の深鉢の胴部片である。焼成は良好。色調は内面にぶい褐色、外面にぶい赤褐色。胎土は砂粒、石英、小礫を含む。3は弥生土器鉢の口縁部片である。遺存高4.0cm。調整は口唇部斜縄文。内面ヨコナデ。外面上部に羽状縄文、その下方にS字結節縄文を施文、無文部赤彩。焼成は良好。色調は橙色。胎土は石英、小礫、黒色粒を含む。

## 6 まとめ

今回の調査では未掘部分も多いため、92号墳の全体の究明には至らなかった。しかし、2地点の調査成果により古墳の規模や周溝の形態が判明した部分もある。

今回検出した内側周溝は、O地点調査で検出した周溝の形態と異なることがわかった。このことから、周溝の位置によって掘方を変えており、古墳の南側は深い周溝が掘られ、南東側は広く浅く掘られた可能性がある。また、外側周溝については、内側周溝が埋没してから墳丘の外側に周溝を掘り直し、墳丘を拡大したことが、C地点調査で判明しており、92号墳も同様と考える。

戸崎城山遺跡では、これまで点的な調査が進められてきたが、調査成果を積み重ねていくことによって遺跡の全体を究明する鍵となるだろう。

## 第3章 天神台遺跡Ⅶ

### 1 調査にいたる経緯

令和4年12月12日付けで、個人申請者より文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出があった。開発目的は個人住宅建設で、開発予定面積は826.44㎡である。開発区域は「周知の埋蔵文化財包蔵地内（天神台遺跡）」で、開発着手前に確認調査を実施する必要がある旨を事業者に説明した。協議の結果、計画どおり、事業を行うことになり、遺跡の規模及び性格を把握するための確認調査を実施することとした。確認調査は、令和5年1月23日から同年1月27日まで、君津市教育委員会で行った。

### 2 地理的・歴史的環境（第16図）

天神台遺跡は、「銀蛇の流れ」と詠われた小糸川が、激しい蛇行を繰り返す中流域左岸の河岸段丘上の標高約20.0mの地点に位置する。遺跡の所在する左岸は、南方の丘陵部に達するまでゆるやかな河岸段丘と低地がよく開けているが、対する右岸は、北側の丘陵が最も小糸川に接近している地点で、その間の河岸段丘は対岸に対してやや狭窄している。当遺跡は、小糸川中流域の左岸において最も川に近い位置に所在している。

発掘調査がされた周辺の遺跡をみると、低地では**35**、姥田遺跡、**31**、泉遺跡がある。姥田遺跡<sup>(1)</sup>では、古墳時代後期の円形周溝遺構、溝跡、水田面、中世の溝跡、土坑が検出されており、溝跡から多量の土器が出土している。泉遺跡<sup>(2)</sup>では、古墳時代後期の集落跡（竪穴住居跡・溝跡・方形周溝遺構・土坑・ピット）と中世の農民層の集落跡（掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・ピット）が検出されている。そのほか、全国的にも出土例の少ない木製高坏が出土している。

左岸の丘陵上では、**G**、万崎古墳群がある。万崎古墳群<sup>(3)</sup>は、7基の円墳で構成され、これまでに6号墳と7号墳が調査されている。6号墳は、6世紀末葉ごろの築造で、墳径約18.5mである。直刀2振、刀子2点、耳環2対（金環2、銀環2）、鉄鏃11点などが出土している。7号墳は、6号墳よりやや後出の築造で、直刀1振、刀子1点、鉄鏃13点などが出土している。両墳とも後世の畑や道によって削平を受けており、旧状が失われていた。その他、小糸川中流域には、右岸の丘陵上に**A**、大山越古墳群、左岸の丘陵上にも**K**、竹原古墳群、**H**、上武勇谷古墳群など、数多くの古墳群が点在しているものの、詳細な調査が実施されていないため、古墳群の実像は明らかではない。

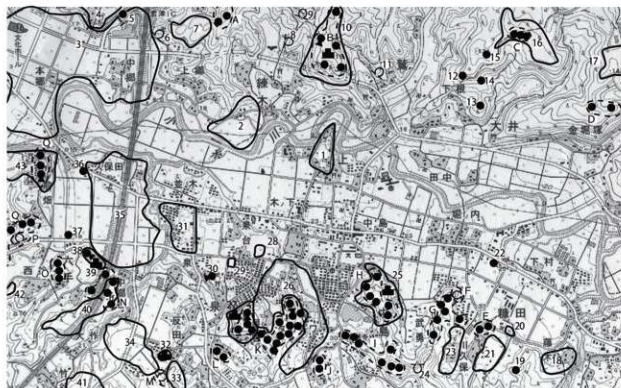
注（1）『姥田遺跡発掘調査報告書』1998 財団法人君津都市文化財センター

『千葉県文化財センター年報 No. 24』1999 財団法人千葉県文化財センター

『平成13年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2002 君津市教育委員会

『平成18年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2007 君津市教育委員会

『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書10』2007 財団法人千葉県文化財センター



- |            |           |             |            |            |
|------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 1. 天神台遺跡   | 2. 寺崎遺跡   | 3. 三重中郷遺跡   | 4. 天王台遺跡   | 5. 三重台古墳   |
| 6. 奥谷横穴    | 7. 柏木遺跡   | 8. 池ノ谷横穴    | 9. 台横穴     | 10. 練木台遺跡  |
| 11. 堀ノ内やぐら | 12. 蟹置庚申塚 | 13. 三ツ塚古墳   | 14. 大井山田古墳 | 15. 蟹置古墳   |
| 16. 怒田ノ作遺跡 | 17. 台山遺跡  | 18. 藤木遺跡    | 19. 台谷塚    | 20. 糠田中田遺跡 |
| 21. 糠田遺跡   | 22. 首塚古墳  | 23. 西郷遺跡    | 24. 武勇谷横穴  | 25. 周東城跡   |
| 26. 竹際遺跡   | 27. 星谷城跡  | 28. 泉御冶屋前遺跡 | 29. 泉南田遺跡  | 30. 白山裏古墳  |
| 31. 泉遺跡    | 32. 荷倉磐跡  | 33. 君ヶ作遺跡   | 34. 馬登泉遺跡  | 35. 純田遺跡   |
| 36. 神裏塚古墳  | 37. 熊野前古墳 | 38. 狐山古墳    | 39. 狐山磐跡   | 40. 鹿島台遺跡  |
| 41. 羽黒下遺跡  | 42. 西谷遺跡  | 43. 川代台遺跡   | A. 大山越古墳群  | B. 奥中谷古墳群  |
| C. 怒田ノ作塚群  | D. 台山古墳群  | E. 宇治塚群     | F. 糠田横穴群   | G. 万崎古墳群   |
| H. 上武勇谷古墳群 | I. 武勇谷古墳群 | J. 長照寺古墳群   | K. 竹際古墳群   | L. 鹿野裏古墳群  |
| M. 君ヶ作横穴墓群 | N. 鹿島台古墳群 | O. 西山古墳群    | P. 六手中谷横穴群 | o. 八幡神社古墳群 |

第 16 図 天神台遺跡周辺の遺跡 (1:25,000)

(2) 『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1996 財団法人君津郡市文化財センター

『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1996 財団法人君津郡市文化財センター

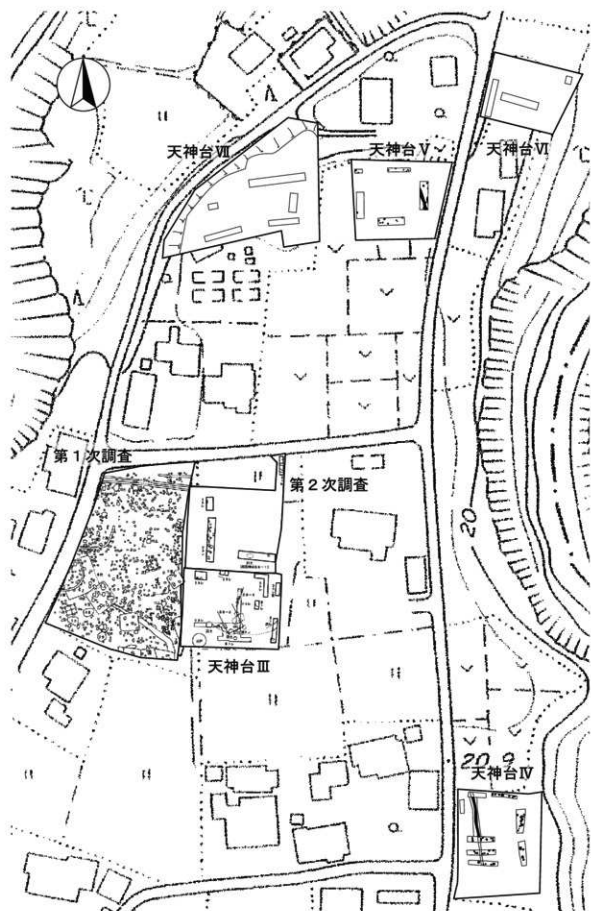
『平成 12 年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2001 君津市教育委員会

『一君津市一 泉遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ』2011 君津市教育委員会

(3) 『一君津市一 西郷遺跡・万崎古墳群』1992 財団法人君津郡市文化財センター

#### 参考文献

『千葉県埋蔵文化財分布地図 (4) 一君津・夷隅・安房地区 (改訂版) 一』2000 千葉県教育委員会



第 17 図 天神台遺跡調査区位置図 (1:1,000)



### 3 遺跡の概要（第17図）

天神台遺跡は、古墳時代から奈良・平安時代の集落跡である。当遺跡内では、これまでに宅地開発や個人居住宅建設に伴い、複数回の調査を実施している。平成2・9・10年度に調査した天神台遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区<sup>(1)</sup>は隣接し、遺跡のほぼ中央に位置する。竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟、土坑27基、溝跡9条、ピット790基が検出されている。平成20年度調査の天神台遺跡Ⅳ<sup>(2)</sup>では、遺跡の東端を調査し、溝跡1条、土坑2基、ピット52基を検出した。いずれも6世紀後半から8世紀前葉のものを主体としている。平成28年度調査の天神台遺跡Ⅵ<sup>(3)</sup>では、溝跡1条、土坑1基、ピット22基を検出した。これまでの調査では、確認されていない弥生土器が出土しており、弥生時代の遺構の存在を示唆する結果となった。平成30年度調査の天神台遺跡Ⅵ<sup>(4)</sup>では、遺構・遺物ともに検出されず、小糸川に向かって傾斜する旧地形を確認した。

註（1）『天神台遺跡発掘調査報告書』1991 財団法人君津都市文化財センター

『平成2年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』1991 君津市教育委員会

『平成9年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』1998 君津市教育委員会

『平成10年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』1999 君津市教育委員会

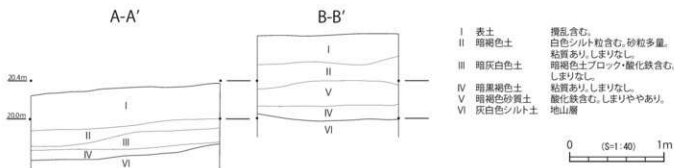
（2）『平成20年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2009 君津市教育委員会

（3）『平成28年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2017 君津市教育委員会

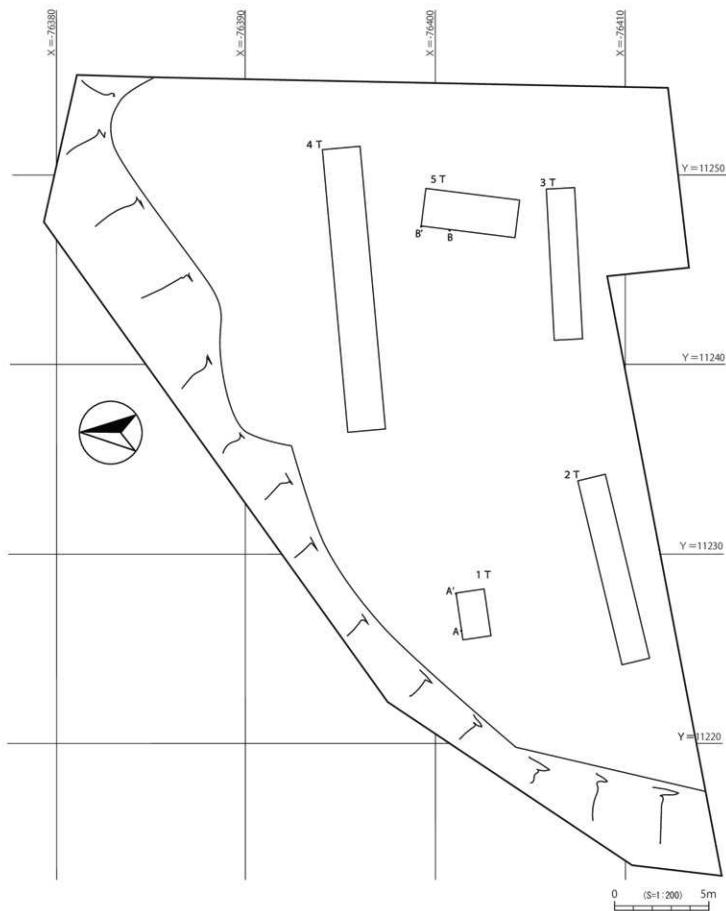
（4）『平成30年度 君津市内遺跡発掘調査報告書』2019 君津市教育委員会

### 4 調査の方法（第18・19図）

確認調査は対象地域内における遺構の分布と種別を把握するため、対象地内826.44㎡内に5本のトレンチを設定した。調査区域の現状は更地、荒蕪地である。調査を実施するにあたり、公共座標に基づく基準点測量は専門業者が行い、この杭を用いて現地での平面図・断面図等の実測作業を行った。写真撮影は小型（35mm）カメラを使用し、カラーリバーサルフィルムを使用した。遺構確認面までの表土を重機で除去した後、鋤鏟を用いて人力により遺構検出作業を行った。現地表面から確認面（Ⅵ層上部）までの深さは0.7～0.9mである。基本層序は1 T北壁（A-A'）及び5 Tの西壁（B-B'）で確認した。調査の結果、遺構は検出されなかった。調査終了後は重機により排土を埋め戻して現状復帰し、現地作業を終了した。



第18図 天神台遺跡Ⅶ基本土層図



第 19 図 天神台遺跡Ⅶトレンチ配置図

## 5 調査成果（第 19 図）

遺構は検出されなかった。遺物は数点出土したが、いずれも小片で図示し得るものはなかった。遺構確認面までの深さは、1 Tで0.7 m、2 Tで0.8 m、3 Tで0.7 m、4 Tで0.9 m、5 Tで0.9 mである。

## 6 まとめ

今回の調査は、天神台遺跡Ⅴの隣接地であったが、遺構は検出されなかった。調査区は台地の縁辺部のため、小糸川に向かって地山が傾斜していくことがわかった。また、当該地点については、土層の観察から平坦に造成していた可能性があると考えられる。



1. 調査前風景 (北→)



2. 3T (北西→)



3. A区遺構確認 (西→)



4. SI-001完掘 (南西→)



5. SD-001完掘 (北西→)



6. A区完掘 (西→)



7. A区埋戻し (北西→)



8. B区遺構確認 (北西→)

図版2 富吉遺跡VI



1. SD-003完掘(南→)



2. B区完掘(北→)



3. 作業風景(北西→)



4. 調査終了(北→)



5. 第6図1



6. 第6図2



7. 第11図2



8. 第11図4



1. 調査前風景 (南東→)



2. 重機による掘削状況 (北西→)



3. 3 T (南東→)



4. 2 T92号境外側周溝断面 (南東→)



5. SD-001完掘 (北西→)



6. 作業風景 (南→)



7. 調査終了 (北東→)



8. 第15図

# 図版4 天神台遺跡Ⅶ



1. 調査前風景 (西→)



2. 重機による掘削状況 (南西→)



3. 1 T (南西→)



4. 1 T北壁断面 (南→)



5. 2 T (南西→)



6. 3 T (西→)



7. 5 T西壁断面 (北東→)



8. 調査終了 (南東→)

## 報告書抄録

ふりがな	れいいわねんど ちばけん きみつしなにいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	令和4年度 一千葉県一 君津市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	富吉遺跡Ⅵ 戸崎城山遺跡 32 地点 天神台遺跡Ⅶ							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	朝倉 唯 曾我真実子							
編集機関	君津市教育委員会							
所在地	〒299-1192 千葉県君津市久保2丁目13番1号							
発行年月日	西暦 2023 年（令和5年）3月27日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		世界測地 系北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
富吉遺跡Ⅵ	千葉県君津市貞元 字猪ノ尻 192 番 4	12225	KT051	35° 19' 20"	139° 54' 19"	[確認] 2022 年 5 月 23 日～ 2022 年 5 月 24 日	53.75 /551.9 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
						[本調査] 2022 年 6 月 1 日～ 2022 年 7 月 1 日		
戸崎城山遺跡 32 地点	千葉県君津市戸崎 字東千箇 1084 番 2 の一部	12225	KT002	35° 18' 55"	140° 02' 37"	[確認] 2022 年 6 月 3 日～ 2022 年 6 月 10 日	56.64 /551.84 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
						[本調査] 2022 年 6 月 13 日～ 2022 年 6 月 21 日		
天神台遺跡Ⅶ	千葉県君津市上 字天神台 648 番・ 649 番	12225	KT036	35° 18' 40"	139° 57' 25"	[確認] 2023 年 1 月 23 日～ 2023 年 1 月 27 日	70.75 /826.44 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
富吉遺跡Ⅵ	包蔵地	縄文時代 古墳時代	古墳時代住居跡 4 軒・溝跡 3 条・土坑 3 基・ピット 36 基		縄文土器、古墳時 代土師器・須恵器、 奈良・平安時代瓦	平成 6 年度に実施した隣接地の 確認調査と同様に古墳時代後期 の住居跡や溝跡等を検出した。		
戸崎城山遺跡 32 地点	集落跡 古墳	縄文時代 弥生時代 古墳時代	古墳時代周溝 2 条・溝跡 1 条		縄文土器、弥生土 器、古墳時代土師 器・須恵器	平成 6 年度に実施した O 地点の 調査と同様に戸崎 92 号墳の周溝 を 2 条検出した。		
天神台遺跡Ⅶ	集落跡	古墳時代 奈良・平安 時代	なし		古墳時代土師器	遺構は検出されなかった。		

令和 5 年 3 月 15 日 印刷  
令和 5 年 3 月 27 日 発行

## 令和 4 年度 一千葉県一 君津市内遺跡発掘調査報告書

富吉遺跡Ⅵ  
戸崎城山遺跡 32 地点  
天神台遺跡Ⅶ

発行 君津市教育委員会  
千葉県君津市久保2丁目13番1号  
印刷 有限会社アドメイクス  
千葉県木更津市清見台東 2-19-16